

ニュウナイスズメ *Passer rutilans* の岩手県初繁殖

藤井忠志¹・渡邊治²・佐々木務³・佐々木朋子³・佐藤和義³

The First Breeding Record of Russet Sparrow *Passer rutilans* in
Iwate Prefecture, Japan.

Tadashi FUJII¹, Osamu WATANABE², Tsutomu SASAKI³, Tomoko SASAKI³, Kazuyoshi SATO³

-
- 1 岩手県立博物館. 020-0102 盛岡市上田字松屋敷 34. Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0102, Japan.
 - 2 雫石野鳥研究会. 020-0503 岩手郡雫石町七ツ森 16-155, Shizukuishi Wild Bird Institute, Iwategun 020-0503, Japan.
 - 3 NPO 法人本州産クマガラ研究会. 020-0002 盛岡市桜台 1-35-14, The Research of Black Woodpecker in Honshu, Japan, Morioka 020-0002, Japan.
-

Abstract

We observed the ecology of the Russet Sparrow *Passer rutilans* during breeding season at Lake Goshō, Morioka City, Iwate Prefecture, Japan. One pair of Russet Sparrow carried nest materials into the cavity and reused an old cavity of Japanese Pygmy Woodpecker *Dendrocopos kizuki* from May 20, with two more young birds fledged on June 24 in the early morning.

はじめに

ニュウナイスズメ *Passer rutilans* は、日本では本州中部以北で夏鳥として繁殖し、冬期は中部以南の本州太平洋岸・四国・九州で越冬する（五百沢 2000）。しかし、本県における生息情報はなく、ましてや繁殖記録は皆無である。今回は短期間ながら1つがいの繁殖活動を観察できたので、その観察記録をとどめておく。

1 **種名・観察個体数**：ニュウナイスズメ *Passer rutilans* 成鳥2羽と雛2羽 + a

2 **観察者名**：藤井忠志・渡邊治・佐々木務・佐々木朋子・佐藤和義

3 **観察日時・場所**：2016年4月30日12:00（発見）～2016年6月24日のうち31日間。場所は岩手県盛岡市の最北に位置し、国土交通省東北地方整備局が管理する特定多目的ダム湖で、電力供給のほか農業用水として周辺市町村の水ガメになっている（藤井・渡邊 2016）。北緯39度40分48秒、東経140度59分28秒。標高228m。年平均気温9.4度。

4 **観察距離**：約22m離れた車中から、8倍の双眼鏡や20倍のフィールドスコープを用いた観察とデジタルカメラ（Canon 30-D）等での記録撮影を行った。

5 **観察した環境**：冬期はオオハクチョウ *Cygnus cygnus* をはじめとするガンカモ類が多数飛来し、2005年には近絶滅種のソデグロヅル *Grus leucogeranus* 幼鳥も渡来した人造湖である（藤井・渡邊 2016）。繁殖用に用いた樹はその湖内道路脇のカワラタケ *Coriulus*



図1 コゲラの繁殖穴に出入りするニュウナイスズメのつがい 2016年5月29日

versicolor が多数密生したシロヤナギ *Salix jessoensis* の古木で、コゲラ *Dendrocopos kizuki* が繁殖用に使用した同一の巣穴を利用した。

6 形態に関する記述：体サイズはスズメ *Passer montanus* とほぼ同じだが、つがいの色彩が異なり、過眼線は細くて黒く、喉も黒い。翼をたたんでいるときには、白い2本の帯となっていた。

7 種を同定した規準：スズメは耳羽が黒いが、本種は耳羽と頬が白い。明瞭で明るい茶の個体と、全体が不明瞭な褐色を帯びた2羽で、雌雄が明らかに異なる色彩であるため、スズメではない。さらに後者は薄茶色で太い黄土色の眉斑が目立つ（高野ほか 1981）個体である。また、地鳴きはチュツ、ツイー、ジジッなどと明らかにスズメとは異なる。以上から、ニューナイスズメと同定した（図1）。

8 観察した行動：本つがいが利用したシロヤナギ古木は、樹高13.8m、巣穴高3.8mで、発見時にはコゲラが巣穴で繁殖中であった。そのため5月19日と5月20日には、その巣穴を巡ってコゲラつがいとニューナイスズメつがいの争いが観察され（図2）、両



図2 巣穴をめぐる争うニューナイスズメとコゲラ

種がもみあいながら地上に落下する場面もあった。5月21日早朝、コゲラの雛が巣立ちした。コゲラの巣穴で繁殖活動を開始したニューナイスズメは5月22日から5月26日まで、雌雄共に不定期ながら巣材を巣穴に持ち込んだ（図3）。5月30日から6月11日までは、雌雄ともに巣をあけることがなく、雌雄交代で在巣していた。気温が平均27度の6月12日の日中、雌雄とも巣をあけて給餌行動を行っていた。その



図3 巣材を運ぶ雄 2016年5月26日

際、巣口に停止する場合には、前趾3本・後趾1本を巣口にかけていた。6月19日の育雛最盛期（図4）の8:00~12:07に記録した雌雄の給餌回数は、雄14回・雌34回で、雌の給餌回数が有意に多かった（ χ^2 検定、 $\chi^2 = 8.333, df=1, 0.001 < p < 0.01$ ）。そのうち糞を運んだ回数は、雄6回・雌4回であった。また入巣回数は、雄7回・雌13回で有意差はなかった（ χ^2 検定、 $\chi^2 = 1.80, df=1, p > 0.1$ ）。巣内滞在平均時間は、雄56秒・雌256秒であった。給餌の際の飛来方角は、雌雄においてほぼ決まっていた。雄は北西から飛来し北西へ飛去し、雌は東から飛来し南へ飛去した。撮影した画像をもとに雛に与えられていた餌は、ミットゲマダラカゲロウ *Drunella trispina* などのカゲロウ目、カワゲラ *Kamimuria tibialis* やトビケラ類などの水生昆虫やメイガ科などの鱗翅目が主であった。給餌行動中、エナガ *Aegithalos caudatus* の巣立ち雛が3度小集団で飛来したときや、メジロ *Zosteropus japonicus* が巣穴前の枝に停止し巣内部をのぞき込んだ時には、雌個体が巣穴内にとどまり、警戒する行動が見られた。6月20日は雌個体が18:20に最終の給餌を行い、18:39に自分のねぐらに飛去した。この日、雌個体は給餌後、ほとんど巣に留まっていた。6月23日は雨天で、巣口からは雛2羽のくちばし及び頭部が観察され、12:00-



図4 給餌交代するつがい 2016年6月19日

14:00 までは雛が巣穴に残っていた。6月24日、5:30には巣内部に雛の姿がなかったが、9:00前後まで営巣木周辺に雌親の姿及び雛の声が確認できた。

9 過去の記録とその文献：本州におけるニュウナイスズメの繁殖について調べられた研究（羽田・熊谷 1972, 上馬・田代 1991, 堀田ほか 1998, 蛭名ほか 2015）は、新潟県、岐阜県、長野県、栃木県、そして青森県がありその全容はよくわかっていない。近年、本州の一部地域においては、繁殖するニュウナイスズメが減少しており、栃木県では絶滅危惧種に指定されている（日本のレッドデータ検索システム 2014）。一方で、北海道では1970年代よりも1990年代のほうがニュウナイスズメの生息域は増加している（環境省 2002）。これらの変化の要因は不明であるが、本種の生態について知見を増やすことは、これまで記録のなかった本県はもとより、日本の鳥類生態学にとっても重要な意義がある。

10 その他：第一発見者 渡邊治

11 考察：本種は本州中部以北で夏鳥として繁殖する（五百沢 2000）ほか、北海道でもコアカゲラ *Dendrocopos minor* の巣などを利用して繁殖していた。東北地方では、秋田県八郎潟での生息記録はある（Important Bird Areas in Japan 2016 検索）ものの稀で、繁殖記録は前述した青森県のみである（蛭名ほか 2015）。さらに、岩手県野生生物目録（岩手県生活環境部自然保護課 2000）や岩手県産鳥類目録および岩手県産珍鳥詳細記録（藤井・四ツ家 2008）にも本種に関する記録が記載されていないことから、今回の繁殖観察が岩手県における初記録と考えられる。なお、本種は雌雄異色で、外見からの性別判定が容易であった。

今回利用されたカワラタケが付着した営巣木は、本種の背面の色彩に酷似し（図1）、天敵からの防衛の意味でも、本つがいが是非、獲得したかったものと推察される。6月10日の観察時には、雄個体が飛来しても雌個体がほとんど巣を離れなかったが、6月12日には雌雄とも巣を不在にし、交代で給餌していた（図4）ので、孵化したのは6月11日と推定された。抱卵から育雛全般にわたり、雌個体の滞在時間が長く、給餌回数も多いため、雌個体が繁殖の主導権を握っているものと思われた。ただ今回の観察では、夜間、在巣するのが雌雄のどちらか不明だったが、6月20日の行動から雌と推定された。高野ほか（1981）によると、ニュウナイスズメの卵数は5-7個としているが、観察

したつがいの卵数は把握できなかった。しかし、雛は少なくとも2羽または2羽以上であった（図5）。育



図5 巣穴から雛2羽のくちばし 2016年6月21日

雛最盛期の朝、雛の声をはっきり聞き取ることができなかったが、昼には観察者にも届く明瞭な音量の成長ぶりであった。羽田（1953）と上馬・田代（1991）は、本州中部におけるニュウナイスズメの環境の特徴のひとつとして、大きなダム湖や主要河川など水域に近いことをあげており、当繁殖地はこの条件に合致した。水域に近い環境では、本種の餌となり得る水生昆虫類が大量に発生し、容易に捕獲できるからではなかろうか。また羽田（1953）は、年平均気温10度の等高線が本種の繁殖期の分布地域と非分布地域との境界線になっていることを考察し、Rutilans Line と命名している。当繁殖地における年平均気温は9.4度で、羽田に合致した。しかし標高は228mで、高標高とはいえなかった。従って繁殖地は、冷涼な場所であるが、標高が650m以上の森林環境とは言えず、本州で繁殖について調べられた研究（羽田・熊谷 1972, 上馬・田代 1991, 堀田ほか 1998）にはあてはまらなかった。また、本つがいにおける繁殖ステージは、5月30日から抱卵を開始し、6月11日に孵化、6月24日未明に巣立ちしたことから、抱卵日数は約12日間、孵化から巣立ちまでの育雛期間が約14日間と推定された。

引用文献

- 蛭名純一・坂有希子・東信行・三上かつら（2015）青森県三沢市で同所的に繁殖したニュウナイスズメとスズメ。Bird Research Vol.11, pp.S1-S7.
- 藤井忠志・四ツ家孝司（2008）岩手県産鳥類目録および岩手県産珍鳥詳細記録。岩手県立博物館研究報告 25：1-11
- 藤井忠志・渡邊治（2016）岩手県御所湖におけるカムリカイツブリの初繁殖。岩手県立博物館研究報告 33：1-5.

- 羽田健三・熊谷聖秀（1972）ニューナイスズメの繁殖期の生活について. 信州大志賀自然教研業績（11）：19-39.
- 堀田昌伸・江崎保男・馬場隆（1998）長野県北部のブナ林とカラマツ林における繁殖期の鳥類群集の比較. 長野県自然保護研究所紀要1：23-29.
- 岩手県生活環境部自然保護課（2000）岩手県野生生物目録. 岩手県，盛岡.
- 五百沢日丸（2000）日本の鳥550 山野の鳥. 文一総合出版，東京.
- 上馬康生・田代憲次（1991）白山周辺におけるニューナイスズメの繁殖期の分布と生息環境. 石川県白山自然保護センター研究報告（18）：17-22.
- 環境省（2002）自然環境第6回環境省自然環境保全基礎調査鳥類繁殖分布調査. 環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田市.
- 高野伸二・叶内拓哉・森岡照明（1981）日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会，東京.

要 旨

岩手県盛岡市御所湖で，岩手県初のニューナイスズメの繁殖を確認した. ニューナイスズメのつがいはコゲラの巣穴に巣材を持ち込み，5月20日から再利用し，6月24日未明に2羽以上の雛が巣立ちした.

キーワード：ニューナイスズメ，コゲラ，御所湖，繁殖